



8月中旬現在、日本はコロナ禍の第7波に見舞われています。暮らしや社会経済をこれ以上停滞させられないという判断から国・県の警報発令基準は緩和され、行動制限もありません。このため感染者数自体は増加し、大都会では医療機関のひっ迫も起こっています。特に山陰両県では感染者数の高止まりが続ぎ、人口比で見れば全国の上位にあります。人権啓発活動が本務の当センターですが、会議や研修会、催しなどが開催しづらく、ここ何年も苦慮しています。変異株や亜種が次々と現れる中、完全な収束は難しいですが、他の感染症と同様に治療できる病として「共生」する時期が来るかもしれません。それを待ちたいですし、また現れるであろう新たな感染症

流行にコロナ禍の経験が活かされて、人権侵害事象の暴発が起きないよう願っています。

【戦争を思う】

隠された爪痕も忘れない

ある全国紙に戦争からの「復員兵」を見出しにした考察が載っていました。あえて本文は読んでいません。というの「日本の復員兵はなぜ語らなかつたのか？」という疑問を長く抱えていて、いつか自分で答えを見つけないと思ってきたからです。

ベトナム戦争から帰還したアメリカの元兵士の多くにトラウマ、心的外傷（PTSD）の症状がみられ、社会問題となった記憶があります。アフガニスタンでも同じことが起こりました。殺されることへの恐怖の連続、殺したこと、残虐な非人道的行為を行ったことへの懺悔が心を壊すのです。もちろん身体的な傷、欠損を伴うケースもあります。幸運にも生還できたのに心や身体の傷のために社会へ適応できず苦しみ続けて、自死を選ぶことも多いといわれています。有名な映画「タクシードライ

バー」（米1976年・ロバート・デ・ニーロ主演）など、この状況がテーマの映画があります。時代背景は違いますが、戦後に長く残る傷跡のひとつです。

ところが、日本の復員兵についてはあまりこの件が論じられていないように感じます。大都市への無差別爆撃やヒロシマ・ナガサキへの原爆投下：そうした被害側の歴史観が大勢を占めています。明治の日清戦争から太平洋戦争まで、大日本帝国は被害国であったわけではありません。戦闘で多くの日本人が亡くなっていますが、相手国の多くの人々も亡くなっています。加害側を経験している復員兵にもこのココロの傷跡があったに違いないと思います。しかし、なぜかあまり証言を聴きませんし、書き物も少ないようです。日本兵の精神はそれほどまでに強靱だったのか、または、心のスイッチの切り替えがうまくいったのか、それとも戦後の国家や社会が封印したのか。私にとっては大きな命題のひとつで、今後も考え続けます。多くの元復員兵が内緒の「思い出」のままお墓に持っていかれて

はいますが…。被害だけでなく加害の実相と実行した痛みも伝えられるべきでしょう。

戦争の人権蹂躪じゅうりゅうは終戦後も続きます。復員兵、戦災孤児、家族の崩壊、望まれず生まれた子どもたち：たくさんあります。あまり光の当たらないこれらの歴史を省いてはいけないと思います。

— 予告 —

【第5回ふれあい人権講座】

■日時 9月27日（火）

午後6時～7時30分

■会場 日南町人権センター

■テーマ 「女性の人権について」

9月の人権相談・行政相談

日時 9月9日（金）

午前9時～正午

会場 子育て支援センター

